

# 子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Parental stress and food allergy phenotypes in young children: A National Birth Cohort (JECS)

和文タイトル:

親の育児ストレスと幼児の食物アレルギー表現型の関連

ユニットセンター(UC)等名: メディカルサポートセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Allergy

年: 2023 DOI: 10.1111/all.16035

筆頭著者名: 山本 貴和子

所属 UC 名: メディカルサポートセンター

目的:

食物アレルギーを持つ子どもとその家族は、感情的な苦痛と不安を抱えがちです。子どもの食物アレルギーの表現型と育児ストレスとの違いに関する報告はほとんどありません。本研究では、エコチル調査において、PSI育児ストレスインデックスショートフォーム(PSI-SF)で評価した育児ストレスと子どもの食物アレルギー表現型との関連を検討しました。

方法:

エコチル調査のデータを用いて、単胎児正期産で、2歳までに慢性疾患の既往のない子どもとその母親を対象としました。PSI-SFスコアと、その構成要素であるCD-SF(子どもの特徴に関するストレス)スコアおよびPD-SFスコア(親自身に関するストレス)を結果変数、食物アレルギーの表現型または食物アレルギーの数を説明変数とした単回帰分析を行い、回帰係数と95%信頼区間(CI)を推定しました。さらに、母親の年齢、母親のアレルギー歴、母親の最終学歴、結婚状態、家庭収入、兄弟姉妹、性別、ストレスイベント、パートナーのサポート、子どもの他のアレルギー歴を交絡因子として考慮し、それぞれの説明変数について調整済み回帰係数とそのCIを推定しました。

結果:

65,805人の子どもが対象となりました。そのうち、7.2%の子どもが2歳の時点で食物アレルギーの診断を受けていました。食物アレルギーのあるグループとない群の母親のPSI-SFスコア(平均値±標準偏差: 39.9±10.3, 39.1±9.9)、CD-SFスコア(19.5±5.4, 19.1±5.2)、PD-SFスコア(20.5±6.3, 20.0±6.1)は、両群で同程度でした。子どもに食物アレルギーのある群では、PSI-SFスコア(係数 .47, 95%CI 0.19-0.75,  $p=0.001$ )、CD-SF(係数 .22, 95%CI 0.07-0.38,  $p=0.004$ )、PD-SF(係数 .24, 95%CI 0.08-0.41,  $p=0.004$ )が有意に高いという結果でした。鶏卵アレルギーについても同様の傾向が見られましたが、牛乳、小麦、ナッツに対するアレルギーとPSI-SFとの明確な関連は見られませんでした。

考察(研究の限界を含める):

本研究の結果から、子どもが食物アレルギーを有することが母親の育児ストレスと関連していることが明らかになりました。しかし、母親のPSI-SFスコアは、子どもの食物アレルギーの診断のある群とない群で同程度であり、親は様々なストレス要因を抱えているため、子どもの食物アレルギーによる養育者の実際のストレスは特に高くはないと考えられました。本研究の新規性は、一般的な不安の指標ではなく育児ストレス尺度を用いて育児ストレスに焦点を当てた点にあります。育児ストレスは子どもの食物アレルギーと関連していましたが、その関連は小さいと考えられました。また、鶏卵アレルギーも同様の関連を示し、さまざまな食品の回避も親のストレスと関連している可能性があります。本研究では、重症度を考慮していないため、結果が効果の大きさを過小評価している可能性があり、重症度を考慮したさらなる調査が必要です。

結論:

親の育児ストレスは子どもの食物アレルギーと関連していました。さらに、鶏卵アレルギーについても親のストレスとの関連がみられました。複数の食品を回避することも親のストレスを増加させる可能性があり、診療においては親のストレスに注意を払う必要があることが示唆されました。